

# 石川県リハビリテーションセンターニュース

目次	全国障害者スポーツ大会に参加して .....	1
	リハビリセンター研修会報告 .....	3
	バリアフリー推進工房報告 .....	4
	難病相談・支援センター報告 .....	6
	高次脳機能障害相談・支援センター報告 .....	7
	虹の窓から「研修に参加して」 .....	8

## 全国障害者スポーツ大会・石川県選手団に同行して

バリアフリー推進工房 北野 義明  
(リハビリテーションエンジニア)



石川県選手団メンバー

全国障害者スポーツ大会をご存じでしょうか？2001年に全国身体障害者スポーツ大会（1965年第1回大会～2000年第36回大会）と全国知的障害者スポーツ大会（ゆうあいピック・1992年第1回大会～2000年第9回大会）が統合されてきた大会です。国内最大の障害者スポーツの祭典として国民体育大会開催都道府県で開催されます。陸上競技をはじめ水泳やアーチェリー、卓球、フライングディスク、ボウリングといった個人競技と車椅子バスケットボール、バレーボールなどの団体競技（7競技）が行われ、各県や各地域の予選会の成績を参考に選考された選手（今年は3202人）によって競われます。今回、平成20年10月に開催

された第8回全国障害者スポーツ大会「チャレンジ！おおいだ大会」に、石川県選手団の役員として同行しましたので、その様子をお伝えします。

石川県選手団は選手23名（競技別では陸上競技11名、水泳3名、卓球3名、フライングディスク4名、ボウリング2名、障害別では知的障害13名、肢体不自由7名、言語機能障害1名、聴覚障害1名、視覚障害1名）、役員17名の総勢40名でした。快晴の県庁前広場で壮行式を行い、いざ出陣。ところが……、大阪空港へのバスはリフト装置がない中二階形式のもので、車いすのまま乗り込めないのです。仕方なく車いす利用者一人一人を抱えて乗り込んだのですが、一人一人がやっと通過できる階段（6～7段程度）及び通路（約50cm幅）を抱えて移動するのはかなり大変でした。（この後、大分での移動も大阪空港からの帰路も同型のバスだったため、同様の状況でした。）これは、介助者の負担ばかりではなく、車いす利用者の身体的そして精神的な負担が小さくなく、無理な体勢で着座したために腕を痛めてしまった人や（介助者に迷惑をかけまいと）トイレを我慢しすぎて体調を崩してしまった人もいました。現在、石川県内にはリフト付やノンステップタイプの貸し切りバスがなく、借りられなかったようですが、今後配慮しなければなりません。

次に航空便。大阪～大分間の航空便はともにプロペラ機（席数76）だったため、通常の搭乗ゲートからの搭乗ではなく、いったん地上を歩行し、階段を上って搭乗しなければならなかったのです。そのため車いす利用者は



移動に使われたプロペラ機  
(階段を上げて搭乗)

空港のルールに則って移動・搭乗（介助用車いすに乗り換え、搬送車で航空機へ移動し、リフト車で搭乗）しなくてはなりません。すると、搭乗1時間前から（本人使用の車いすやクッションは荷物として積み込むために没収されてしまい）空港備え付けの介助用車いすに座られ、そのまま自走不能の状態を過ごさなくてはならなかったのです。しかも、その車いすの座面はプラスチック製で、褥そうを誘発させてしまいそうな状況でした。また帰路では、大阪空港内バスターミナルへの移動途中のエレベーターが整備中で使用できず、その上、係員がいないばかりか迂回ルートもなく、移動に難渋したのです。結局、階段を（荷物等も含めて）介助者が抱きかかえて移動しましたが、

空港内のバリアフリーに関してもまだまだ配慮が必要です。

このように移動には問題が多かったのですが、何とか大分に到着。その翌日は競技会場での公式練習です。私は陸上競技身体障害者の部（特に車いす800m、1500mの出場選手）が担当で、選手の介助やレースエンジニアとして競技用車いす（ロードレーサー）の調整が主な役割でした。この練習時間内に選手のコンディションとコースコンディションに合わせて機器を調整（ハンドルの切れ角やシート調整等）しなくてはならず、会場の九州石油ドーム（サッカーJリーグ大分トリニータのホームグラウンド）を見回す余裕もなく必死に作業し、何とか競技に臨める状態にすることができました。

そして、大会初日。独特の緊張感に包まれた会場で開会式です。皇太子殿下が見守られる中、3000人を超える選手が入場。（団体から引き継いだ）炬火点火、選手宣誓など開会式のプログラムが進むにつれて気持ちが高揚し、4部構成の歓迎アトラクションでは、数千人の出演者がマスゲームやダンスなどを繰り広げ、そのスケールの大きさに感動しました。その余韻冷めやらないうちに競技開始です。ドーム会場に歓声やアナウンスが鳴り響き、緊張感の中、翌日、翌々日にわたって熱戦が繰り広げられました。今回は、日本における障害者スポーツ発祥の地である大分県での開催ということもあり、多数のパラリンピック日本代表選手やプロ契約選手も参加し、大会記録が続出する競技性の高い大会となりました。私は担当選手の同伴スタッフとして競技フロアまで同行することができ、トラックサイドから間近で競技を見、選手を応援することができ、興奮ひとしおでした。しかも担当した選手は2種目とも見事優勝、石川県選手団全体としても金10、銀10、銅9、合計29個のメダルを獲得、過去最高の成績を収めることができ、感激でした。

競技成績だけではなく、この大会参加を通してのさまざまな交流も有意義だったと思います。若い（学生）選手と先輩選手、他の障害を持つ選手やスタッフなどの間で、スポーツそのものからスポーツに取り組む姿勢、さらに体調調整や生活方法、就労等といった社会活動に至るまで、さまざまなアドバイスや情報交換が行われていました。宿泊先の大浴場などは恰好の勉強場で、先輩選手の入浴方法を見て、自分と比較しながらテクニックを学んだり、練習したりしていました。このような直接的な技術はもちろん、他の人々の人生に触れることによって、自己の形成と今後の社会参加に繋がる貴重な経験ができたはず。しかしながら、なかなか他の人々と交流を図れなかった選手もいました。一方で、選手に対して過保護だったスタッフもいたようです。すべての参加者が将来に向けてより有意義な交流を図るには、適度な距離感や優しさ、そして時には厳しさを持って接することも重要だと思います。

競技成績もさることながら、さまざまな障害を持つ選手達とともに行動し、交流を深められたことは、私にとって貴重な経験となりました。身体機能だけではなく、感情や思いを含めた生活のイメージを持つためのヒントが得られたように思います。一方、移動手段や環境整備、障害のある人達への基本的な配慮など、社会の中で課題が山積みであることも認識できました。今後も障害者スポーツそして生活に関わっていく中で、ハード面においてもソフト面においてもバリアフリー実現に向けて努めていきたいと思っています。



開会式歓迎アトラクション



陸上競技の様子（車いす800m）

## 平成20年度 リハビリセンター研修会報告

### 1. 地域リハビリテーション研修会

今年度の地域リハビリテーション研修会は、平成20年12月7日(日)にいしかわ総合スポーツセンターで開催しました。平成20年度の診療報酬改定において「地域連携診療計画管理料」を算定できる対象疾患として脳卒中が追加されたことから、全国的に地域連携バスの普及が拡大しています。そこで今回の研修会では、脳卒中のリハビリテーションに関して先進的な取り組みをされている森ノ宮病院院長代理の宮井一郎先生より基調講演を頂きました。また、北陸三県より脳卒中リハビリテーションの取り組み状況や急性期から回復期・維持期への連携状況、課題などを報告していただき、地域連携の充実に向けて意見交換を行いました。

研修会には、北陸三県の急性期、回復期、維持期リハに従事する医師、看護師、理学療法士、作業療法士、ケアマネジャーら181名の参加があり、脳卒中地域連携バスに対する関心の高さがうかがえました。

終了後のアンケート結果では、「脳卒中の新しい治療方法」や「連携バスの取り組み方」、「急性期、回復期、維持期リハの連携」について「参考になった」との回答が多数ありました。また、地域連携バス導入にあたっての課題としては、「職種間の理解の差」を挙げた人が最も多く、次いで「業務量の増加」「職員の理解不足」「病床数や体制、設備の問題」などが挙げられていました。これらのアンケート結果を参考に、来年度の研修会を企画していきたいと考えています。



#### 第1部 基調講演「脳卒中のリハビリテーション最前線」

講師：森之宮病院 院長代理 宮井 一郎 先生（リハビリテーション専門医）

#### 第2部 パネルディスカッション「北陸三県における脳卒中リハビリテーションの現状」

～急性期から回復期・維持期への連携を考える～

富山県の立場から：富山県高志リハビリテーション病院 院長 野村 忠雄 先生

福井県の立場から：福井県済生会病院 脳神経外科部長 宇野 英一 先生

石川県の立場から：恵寿総合病院 副院長 川北 慎一郎 先生

### 2. 福祉用具体験教室

平成20年5月30日(金)、小松市西部地区体育館に於いて、小松市安宅公民館と安宅校下公民館の要請で福祉用具体験教室を行いました。バリアフリー移動展示車ほっと石川あんしん号の展示と車いすやいろいろな福祉用具を使った出前講座です。安宅校下に住む人や安宅保育園の園児達約70人が参加しました。お年寄りや障害がある人々が使いやすい食器類、車いすや歩行器を実際に触ってみたいり乗ってみたいりして体験しました。お年寄りや幼稚園園児とがいっしょになって参加するというめずらしい企画でしたが、子ども達の好奇心いっぱいの視線には感動しました。



熱心に職員の説明を聞く子どもたち

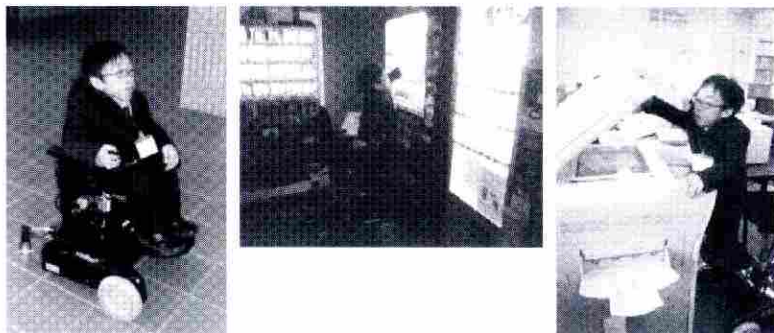


車いすや歩行器の体験

## 平成20年度 バリアフリー推進工房の活動

### 1. 既製品で解決できない福祉用具や住環境の相談に対して、医療、工学、建築の総合技術によって応援しています。

※ 電動昇降式電動車いすを利用し、就労がしやすくなりました！



電動昇降式電動車いすを利用することで、小回り性も良く、今まで届かなかった箇所での作業が可能になりました。自動販売機やコピー機を利用している様子です。

座面が昇降する電動車いすを採用し、さらに電動車いすに乗ったまま立って作業ができるように、足置き台の改造も行ったことで、高いところでの作業が楽にできるようになりました。また、小回り性の高い前輪駆動タイプのEufoflex 電動車いすの選択が、狭い事務所の移動に効果を上げています。

このような医工学連携による技術支援や福祉用具の試用などを希望される方は、バリアフリー推進工房にご相談ください。

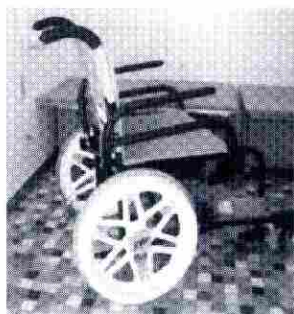
### 2. 福祉用具や住環境に関する課題やニーズを当事者の方々とともに体系的に整理し、基礎研究や技術普及につなげています。

〈ニーズの高い福祉用具、住環境の基礎的研究開発と調査研究〉

- ・身体特性に応じた操作インターフェイスの研究（簡易電動車いすインターフェイスの開発）
- ・施設のユニバーサルデザイン（UD）研究（水族館や動物園などのレクリエーション施設のUD、公営住宅や国・県・市道のバリアフリー化検討 等）
- ・生活・環境適応型車いすの研究開発（自走式水まわり専用車いすの施設利用の追跡調査によるさらなる改善検討 等）
- ・就学・就労・生活のための道具・環境づくり（学校教育用椅子や自助具などテクニカルエイドから抽出された道具の試作検討 等）

※ 自走式水まわり専用車いす

#### —日本リハビリテーション工学協会 福祉機器コンテスト 特別賞受賞—



今年度開催された日本リハビリテーション工学協会主催の福祉機器コンテストで特別賞を受賞しました。この水まわり専用車いすは、車いすを自走される方が、浴室やプール等で、安心、快適に移動できることを目的に開発したものです。特徴は自走ができ、シート貼りによって姿勢が安定すること。また、前輪をやや前に出し、左右に広げることで、車いすの安定性を高め、さらに通常より幅広い足置き台にしたことにより、そこに一旦腰を下ろして床へ移動する場合も安心です。必要な方は是非利用してみてください。

### 3. 県内企業・団体に対する福祉用具、住環境、ユニバーサルデザインの情報提供、製品評価、開発指導を支援しています。

〈企業等に対する福祉用具、ユニバーサルデザインの支援〉

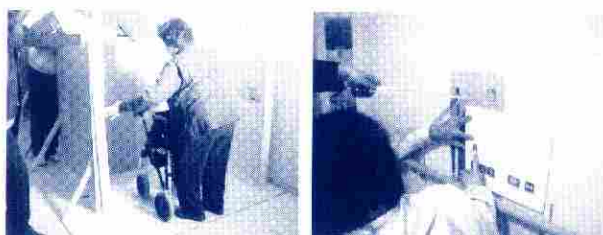
- ・ユニバーサルデザイン折れ戸の開発と検証（コマニー）
- ・カラーユニバーサルデザイン

## 〈行政に対するユニバーサルデザインの指導〉

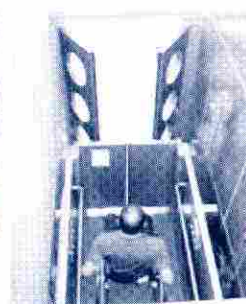
- ・旧県庁舎本館南ブロック、金沢城址公園、県立美術館、いしかわ総合スポーツセンター、いしかわ動物園、のとしま水族館、別所岳サービスエリア、平和町歩道、県立南部総合養護学校、県営住宅 等

## 4. みんなで考えた『県立美術館』のユニバーサルデザイン！

9月に県立美術館がリニューアルオープンしました。改修にあたり、県の土木部営繕課ではユニバーサルデザイン検討会をつくり、障害のある方々とバリアフリー推進工房のスタッフが一緒になって改修内容の検討・検証を進めてきました。主な配慮点としては、正面玄関に広く直線的なスロープと手すりを、本多の森から美術館への入口には昇降機を設置し、館内にはベッドつきトイレの設置をはじめ男女別トイレのバリアフリー改修、エレベーター・エスカレーターの設定など様々な箇所の使いやすさを工夫しました。この改修工事により、多くの方々が美術館を訪れ、快適にご利用頂ければと思います。



検証にあたり、昇降機、エレベーターの実物大モデルを工事現場に設置し、肢体や視覚、聴覚に障害のある方々と一緒に利用のしやすさを検討しました。



リニューアルオープンした美術館の正面玄関・トイレ・昇降機

## 5. 石川発のカラーバリアフリー研究が世界に広まる！

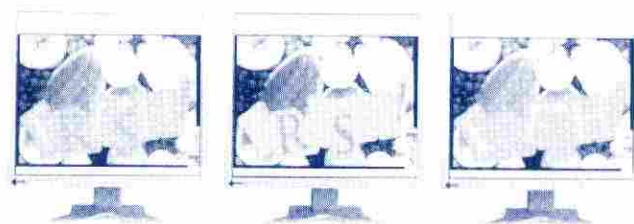
— アドビシステムズのソフトウェアに標準搭載 —

推進工房と工業試験場では、これまでにカラーバリアフリーの研究や啓蒙活動を行ってきました。今、この研究成果が世界中で広く使われようとしています。

カラーバリアフリーとは、色の感じ方が一般の人と多少異なる人にも対応することです。色の感じ方が異なる色弱者は、日本では約300万人いるとされています。これは身体障害者手帳を所有している約350万人（H18）に近い人数です。しかし、その見え方に関する理解が不足していたために、何も対処されてこなかったのが現状でした。そこで、我々は色弱者が見分けにくいと感じる色に変換するソフトウェアを開発し、これによって身の回りのデザインのどこが見分けにくいかが分かるようになりました。

このソフトウェアは、まず2006年に県内企業である㈱ナオから製品化され、カラーバリアフリーの推進に役立ってきました。さらに、今回は世界で最も多くのデザイナーが使用する画像編集ソフトウェアであるアドビ社の「イラストレータ」と「フォトショップ」に組み込まれました。世界中のデザインを職業にしている大多数の人に使われるソフトウェアにこの機能が標準で組み込まれることは、カラーバリアフリーの推進に大きく貢献するものと思われまます。

施設の案内サイン、催し物案内、パンフレットなど身近なものが色覚バリアフリーになっているか。一度、身の回りを見つめ直してみてもはいかがでしょうか。

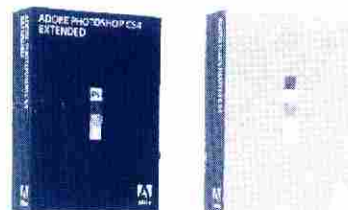


オリジナルモード

P型モード

D型モード

■ ㈱ナオの色覚シミュレーションモニター  
(ボタン1つで色弱の2つのタイプの色に切り替わります)



■ 色覚シミュレーションが搭載されたアドビシステムズ㈱のPhoto ShopとIllustrator

## 平成20年度 石川県難病相談・支援センター事業実施状況（4月～12月）

### 1. 難病相談

相談方法	件数(延)	割合
電話	370	62.7%
面接	145	24.6%
電子メール	35	5.9%
訪問	40	6.8%
合計	590	100.0%

相談内容	件数(延)	割合
医療・治療	137	19.5%
病気・病状	94	13.4%
精神的支援	102	14.5%
介護・看護	20	2.8%
福祉制度	49	7.0%
就労・就学	31	4.4%
患者会	38	5.4%
医療費助成	15	2.1%
リハビリ、住宅改修、福祉用具の適合等	172	24.5%
その他	45	6.4%
合計	703	100.0%

◆今年度は、従来の事業の中で、特に神経難病患者の療養支援をさらに進めるために、保健福祉センター毎にALSの事例検討会、SCD患者等懇談会を行いました。また、難病の就労支援においては、企業の健康管理を行っている保健師等との連携を図りました。

◆相談内容については、リハビリ、住宅改修、福祉用具の適合、精神的支援が増加しています。これは、石川県リハビリテーションセンター作業療法士等との連携が進んでいることや、精神的支援では心理相談員が定期的に面接し支援していることによると思われます。

◆今後も、重症神経難病患者の療養支援体制の整備、就労支援等進めていく予定です。

### 2. セルフマネジメント事業（ヨーガ教室）

日時	内容	講師	参加人数
毎月第1、3土曜日 午前中	心身をリラックスさせるヨーガ体操	ヨーガ研究所（SCD患者）	197 1回11人

### 3. 専門職研修会

日時	研修内容	対象	参加人数
6月20日、7月4日、 7月11日、7月25日	ALS事例検討会 医王病院 駒井 清暢 氏	県保健福祉センター (各センターで実施)	16
8月8日	福祉用具研修会 石川県リハビリセンター 作業療法士	作業療法士、理学療法士、 ケアマネジャー、保健師他	18
11月1日	炎症性腸疾患食事療法 社会保険中央病院 斉藤 恵子 氏	栄養士他	36
12月5日	重症神経難病地域支援 日本ALS協会理事 川口有美子 氏	ケアマネジャー、保健師他	102
12月5日	重症神経難病患者在宅療養支援 医王病院 駒井 清暢 氏、永井富美 氏	県、金沢市難病担当者	9

### 4. 難病支援連絡会

今年度難病ネットワーク会議は、災害時の難病患者支援について実施しました。その他に特定疾患関連団体等連絡会、神経難病拠点病院連絡会を実施しています。

### 5. 難病患者生活支援啓発普及事業（患者自身が自分の病気を語る事業）

日時	研修内容	対象	参加人数
10月30日	「難病患者の体験談その①」OPLL友の会	金沢医科大学看護学生	63
11月26日	「難病患者の体験談その②」リウマチ友の会	金沢大学 理学療法、作業療法学生	50

### 6. その他

各県保健福祉センターと共催で神経難病（主に脊髄小脳変性症）研修会を実施。就労支援の一環として、県内10カ所の企業を訪問し、現状を把握又は難病相談支援センターのPRを実施しました。

## 平成20年度 石川県高次脳機能障害相談・支援センター事業実施状況（4月～12月）

### 1. 相談事業

相談方法	件数(延)	割合
電話	215	65.3%
面接	90	27.4%
電子メール	9	2.7%
訪問	15	4.6%
合計	329	100.0%

相談内容	件数(延)	割合
医療・治療	14	2.9%
病気・病状	15	3.1%
リハビリ	62	12.9%
障害の理解・対応	108	22.4%
生活・対人関係	29	6.0%
精神的支援	55	11.4%
就学	73	15.1%
就労	59	12.2%
患者会	2	0.4%
福祉制度	21	4.4%
その他	44	9.1%
合計	482	100.0%

- ◆ 高次脳機能障害相談・支援センターが設立して2年目になります。
- ◆ 今年度は、家族会支援（NPO法人化に向けて等）、医療機関との連携、社会資源の調査を特に実施してきました。
- ◆ 相談事業については、2年目ということもあり、相談件数が増加しています。なかでも障害の理解・対応、就学に関する相談が増えています。
- ◆ 生活支援教室は、従来の認知レクリエーションの他に心理相談員によるナラティブセラピー（自分史作りと発表）を行いました。当事者にとって、これまでの自分の人生を振り返る等の作業は好評でした。
- ◆ 今後も、本人、家族への支援を強化していきたいと考えております。

### 2. 生活支援教室（生活する能力の向上を図るための教室）

日時	内容	対象	参加人数
毎週水曜日 午前10時～午後3時	話し合い、対応、 認知レクリエーション他	作業療法士 保健師、心理相談員他	190 1回4.9人

### 3. 家族教室

日時	内容	参加人数
6月28日	高次脳機能障害リハビリテーション 金沢脳神経外科病院 河崎 寛孝 氏	16
8月30日	家族の関わりについて 日本脳外傷友の会 東川 悦子 氏	17

### 4. 患者交流会

日時	内容	参加人数
6月15日	情報交換・話し合い	9（本人4、家族5）

### 5. その他

高次脳機能障害社会資源調査を実施

## 後天性脳損傷の子どもを支援する シンポジウムに参加して

指導課 作業療法士 東 ひとみ

平成20年11月24日、横浜市で開催されたNPO法人日本脳外傷友の会主催の「後天性脳損傷の子どもを支援するシンポジウム～小児高次脳機能障害の社会環境を考える～」に参加しました。約500人の収容会場に491名、北海道から大分県の32都道府県から、当事者、家族、教育機関、医療、福祉現場と多くの関係者が参加していました。

シンポジウムは、最初に脳外傷により高次脳機能障害をもつ当事者や家族の方々からの生の声でした。高次脳機能障害のある子どもの診断や就学支援が見過ごされており、本人・家族の苦労や想いが切々と語られました。しかし、その一方で子どもたち自身や家族が希望を持ち続け、教育や医療機関などの支援を受けながら、お互いに可能性を高めていく姿も知ることができました。その後、医療・福祉・教育の各分野からの報告とパネルディスカッションが続きました。身体症状がみられない幼少の高次脳機能障害の子どもでは、医療機関においては見過ごされてしまうこと、教育機関では高機能自閉症とわかってしまうことなどが報告されていました。そして、教育現場の教諭が「高次脳機能障害」という障害があること知り、相談窓口へ相談することが必要と提言されました。

リハビリテーションセンターでは、障害のある方々の自立と社会参加を推進するために、専門スタッフが地域での相談、生活・就労・就学支援を実施しています。平成18年度より難病相談・支援センター、平成19年度より高次脳機能障害相談・支援センターが設置されたことにより、就労・就学に関する支援依頼が増えてきており、実際に高次脳機能障害の子どもに就学支援を行っています。その時、私たちは子どもの支援と同時に、教諭をはじめ周囲の方々に対して「高次脳機能障害」を理解してもらうことを心がけています。提言にあった相談窓口とは、石川県の場合当センターであるため、今後もより関係機関の理解と連携を密にしていきたいと思えます。

最後に、今回シンポジウムに参加して、子どもは障害があっても沢山の希望と可能性を秘めていることを改めて知ることができ、センターとして、また作業療法士としてその一助に関われよう努めていきたいと思えます。

---

編集・発行 石川県リハビリテーションセンター  
〒920-0353 金沢市赤土町≒13-1  
TEL (076) 266-2860 FAX (076) 266-2864  
E-mail ipre@pref.ishikawa.jp  
<http://www.pref.ishikawa.jp/kousei/rihabiri>

---